斎藤緑雨の「恋」と「闇」

―恋愛神聖論から道徳回帰への時代の中で―

塚本　章子

はじめに

斎藤緑雨を評した北村透谷の「『油地獄』を読む」（明二五・四、五）に、次のような一節がある。

吾人は非精無心の草木と共に生活する者にあらず。欲に荒さび、情に溺れ、痴に狂する人類の中に棲息する者なり、（略）斉しく情を解し同じく痴に駆られ、而して己れのみは身を挺して免れたる者の、他に対する憐憫と同情は遂に彼をして世を厭ひ、もしくは世を罵るに至らしめざるを得んや。世を厭ふものを以て世を厭ふとするは非なり。世を罵る者を以て世を罵るとするは非なり。世を厭ふ者は世を厭ふに先ちて、己を厭ふなり。世を罵る者は世を罵るに先だちて、己を罵るなり。己れを遺れて世を遺るゝを知る。己れを空うして世を空うするを知る、誰れか己れを厭ふ事を知らずして真の厭世家となり、己れを罵ることを知らずして真の罵世家となるを得んや。

世の中のあらゆるものを罵倒しながら、今ひとつ内省の視点に欠け、ただやみくもに罵り続けているだけの皮肉屋。緑雨をこのようなイメージで固定していったのは、あるいは、こういった言葉であったのかもしれない。

だが、緑雨が心を許したとされる作家樋口一葉の日記（明二九・七・一五「ミつの上日記」）には、「世の人いはく正太夫に涙なし　たゞ嘲罵の毒筆をもてるのミと　こハ皮相の見なるなからんか　おもひ余りては涙をうちにのみこみつゝにくき意見もいふ事あり」という言葉を、緑雨が吐露していたことが記されている。緑雨にもまた、「己れを罵り」、「己れを厭ふ」ような「おもひ」や「涙」があったとすれば、その心の深淵には、どのような暗闇が広がっていたのであろうか。小稿ではそれを、緑雨の「恋」の捉え方を手がかりに考えてみたい。

当時の作家たちにとって、男女関係の変容は、抜きさしならぬ問題であった。明治二〇年前後の時代の中で、男女の関係は大きく変化する。理想とされる女性像が変化し、恋愛神聖論が提唱され、「色」から「恋愛」へ、「家」から「ホーム」へという、新たな理想が描かれていく。「恋」は、明治の文学が描いてゆくことになる人間の心の「闇」を生み出す一つの要因となる。少し挙げれば、二葉亭四迷の「浮雲」（明二〇・六～二二・八）、北村透谷の「厭世詩家と女性」（明二五・

二）とその後の自殺、尾崎紅葉の「心の闇」（明二六・六～七）等、いずれも、「恋」がその言葉の華やかさの陰で生み出してゆく、心の狂いを浮かび上がらせている。

ほぼ同じ時代に生きながら、緑雨の女性や「恋」に対する態度は、あまりに異様である。先行論において、緑雨は女性を激しく嫌悪したと言われてきた。少し見てみたい。湯地孝氏[1]は、「その小説に現はれてゐるところを要約してみると、彼は先ず女性を信用のできないうるさい厄介者と見ている。（略）またもう一つは、女性を単に肉欲の対象としてのみ認めてゐる。」と指摘する。また、野口武彦氏[2]は、「緑雨は女がきらいだった。あるいはむしろ、きらいでありながら満更必要でないこともないこの対象に、そうであるがゆえにひとしおの嫌悪を感じていたというべきだろうか。」と述べる。そして、「かくれんぼ」が恋愛神聖論への反論であったことに触れた後、「特に女性論の多い『眼前口頭』では、ほとんど枚挙にいとまないくらいに辛辣なアフォリズムで女をこき下ろしている。」と論じる。また塚越和夫氏[3]も、「緑雨の特徴的な人生観に、女性嫌悪があげられる。」と指摘している。このように、緑雨の女性嫌悪は、大方の一致する見解となっている。

だが、この緑雨の女性嫌悪とは、一体何だったのだろうか。確かに緑雨は、恋愛神聖論を批判し、後の「眼前口頭」（明三一・一～三二・三『万朝報』）などのアフォリズムでは、激しく女性を罵倒している。しかし、同時に緑雨は、樋口一葉という女性作家を見出し、高く評価していった一人でもある。一葉と緑雨の小説における類縁性と差異については以前の論[4]で考察したが、女性を嫌悪する緑雨が、なぜ純情な初恋を描いた「たけくらべ」（明二八・一～二九・一）に、自分の「門三味線」（明二八・七～八『読売新聞』）に影響の跡を残すほどの深い感銘を受けたのか。そして、一葉宅を頻繁に訪問し、一葉の死後、『校訂一葉全集』（明三〇・六）の校訂に尽力を惜しまなかったほど、一葉とその文学に強く惹かれていったのだろうか。

明治二〇年代から三〇年代にかけて、恋愛神聖論の隆盛から道徳回帰へと展開する時代の中で、緑雨の「恋」と「闇」とを捉えてみたい。

一

明治期前半は、恋愛神聖論が語られ、一つの勢力となっていた時代であった。巌本善治を始めとする『女学雑誌』の筆者たちは、その牽引役であった。例えば、『女学雑誌』二五五号（明二四・三）には、次のような文章[5]が見られる。

愛の真相は生理的の作用にあらず、又憐憫の義侠心にあらず、実に心霊と心霊、パアソンとパアソンとの微笑の握手なり、何ぞ他に要むるを俟たん、されど人間もとこれ社会的の動物なり、さては学識、趣味、理想等の一致を要するなり、一致とは対等の意にあらず、只感知し通達し得るの謂なり、換言すれば理想にも学識にも趣味にも双方の間に相知らんことなり、相通ぜんことなり、アヽ霊肉両界の知己、これ円満なる対等の愛の謂なり。

このような時期に、緑雨は、「油地獄」（明二四・五～六『国会』）、「かくれんぼ」（明二四・七春陽堂）を発表するのであるが、これらに恋愛神聖論に対する批判が込められていたことは、すでによく知られている。「油地獄」は、純朴な貞之進という書生が小歌という芸妓

に恋し、妄想を肥大化させていく様を、嘲笑を込めて描き出している。

緑雨自身が、「かくれんぼ」について述べた「作家苦心談」（明三〇・五～七『新著月刊』）には、次のように書かれている。

・今一つは、其の頃はやッた恋は神聖だといふ説が癪にさわッたことゝ、此の外に又、あれを書く気に自分をさせたのは、魯文以来、千篇一律になッた芸娼妓ものが、卑猥だと云ふんで排斥されてゐましたネ、此の風潮に対してヤケにさかさまに出かけて見やうと思ッたので、芸娼妓だッて恋も知ってゐるし、人間らしい所もあると云ふのを見せてやらう、と云ッたようなつもりで、

・所謂恋愛論者はひどく女を有難がる。一体恋愛なんてものは綺麗なこと云ッて穢醜夢を見てゐるもんに過ぎない。鴎外漁史訳の『埋れ木』に「恋とはうつくしき夢を見て、きたなきことをするものぞ」とある、が是れも一面の理屈だけれども、自分の考へるところでは、綺麗さうなことを云ツて、醜穢夢を見てゐる方が真実だと思ふ。

ここで緑雨は、恋愛神聖論の持つ矛盾を、芸娼妓に対する新たな抑圧の発生と、身体の排斥という点から突いている。それは今日的な視点から見ても新鮮であり、鋭い指摘であったといえる。

だが、この恋愛神聖論への攻撃の言葉の背後には、緑雨のある悲哀が見え隠れしている。

徹頭徹尾恋愛は神聖だなぞと云ふことは嘘だ。体のいゝことを云ふのは虚偽だ。（略）又恋の有難くない証拠は、初恋のやつが添ッた例が、今まで一つもない。女にしろ、男にしろ、始めて惚れた者が出来た時に区役所に届出させて、双方気のあッてゐるやつを一所にしてやッたら知らないこと、当然ぢや初恋の遂げるのは殆どない。夫婦だなんて威張ッたッてつまらない。真の愛から出来たのぢやない。互に結婚する前に何処のやつに初恋をしたやつが、詮方なしに此方へ向きを換へて来たのだ。鮨をくひたいと思ッても、蕎口の都合で蕎麦にして置くのに違ひない。愛だの恋だのを綺麗に思ふのには、何か外から色をつけなくては出来ない、生地の人間に於いちや出来ないこッた。

ここには緑雨の、「初恋」という「真の愛」への深い執着と、それが叶えられるものではないという失意が見られる。「初恋」とは叶えられぬものであるという意識は、緑雨の中に根強く存在し続けたようである。「眼前口頭」には、「花間に月下に、言はぬ思ひの唯打向ひて果つべき生涯ならば、われは恋の神聖を疑はじ。彼れと此れとは倶に初恋の、つゆ動かぬ保証を公に得るものならば、われもさまでは疑はじ。」といった一節が見られる。緑雨は、けがれなき「初恋」などというものがあり得ぬことを、信じて疑わない。

更に緑雨は、「作家苦心談」で次のように述べる。引用は少し長い。

自分が彼著（注・「かくれんぼ」）をかく前の頃は、斯う考えてゐた。詰まらぬものを活字にして世間に出して、又活字で評されて、虚名が出て、其為に自分が左右されて其れが邪魔になって頭があがらない、窮屈な思ひをする、何故かういふことになつて来たか、とつく〴〵思ッた、其れで自分の心は逆境に立つてゐたといふ故もあるが、一日も太平と云ふことを知らない。太平だと云ッたつて、何も金が懐中にあつて、柱を背負て、両脇に女を置くことではない。宿直料を貰ッて、帰がけに紫唐縮緬に牛の皮つゝんで、

妻君と肉を譲りあッて食ふ時に太平があるのだ。車屋が仙台鮪の安いのを買ッて帰り、女房は家にゐて破れ火鉢の側に、コロップの取れた徳利に酒を買つて待つている、すぶたの裏から焼芋が出る、と云うのも太平である。其れで年を取れば、亭主に内密で嫁がかくして呉れた小遣もッて出かけて、孫の土産でも買ッて帰る、陋路口まで来た姿を孫が「お祖父さん帰ッてきたの」と縋る、「お前には此所におみやがある」と五文十文の土産を出す時も矢張太平だ。自分は活字に頭を左右されてゐたから、此の太平を見ることが出来ないんだ。太平が出来ないものなら、寧世の中を、常に黒雲の立ち迷うてゐる、闇にしてしまふ方がよいと思ッた。道徳だらうが、法律だらうが、縄一筋のこッたから、何でもしたい儘で送る方がよい、放埒の限りをつくし、悪事の限りをつくして見た方がよい、と其の時分不図考へたことがあッたんだ。

（略）太平が出来ない位なら、世の中を闇雲にして仕舞ふ方がいゝ、（略）花もどうせ散る花なら、早くちるがいゝ、嵐をつかまして愚痴を云ッてるよりは、棒をもッていッて、はたき落として仕舞へと思ふ。

緑雨は、慎ましいが情に満ちた家族の幻影を描き出す。そしてこの「太平」を得られない自己の寂しさを吐露するのである。「自分は活字に頭を左右されてゐたから、此の太平を見ることが出来ないんだ。太平が出来ないものなら、寧世の中を、常に黒雲の立ち迷うてゐる、闇にしてしまふ方がよいと思ッた。」という言葉には、「書く」ことに憑かれ、平穏な世からはみ出した人間の姿と、「世の中」への激しい拒絶感が見られる。

緑雨の恋愛神聖論への批判の背後には、「初恋」の不可能という拭いがたい意識と、「書く」ことに取り憑かれた人間が失ってしまった、「太平」への憧れがあった。それは、新しい西洋型の「恋愛」や、「ホーム」というものが、強く語り出されていく時代の中で、逆に膨らまされていった疎外感ではなかったか。

緑雨の「闇」、そして「書く」こともまた、「恋」に対する喪失感を根源に持っているのである。

二

緑雨の「売花翁」（明二六・二『ほご袋』所収春陽堂）は、「油地獄」（明二四・五～六）、「かくれんぼ」（明二四・七）よりも早く、明治二三年四月に、初案が発表されている。[6]「売花翁」には、先に述べたような緑雨の「恋」[7]や「太平」に対する捉え方と、不条理感とが描き出されている。それは、緑雨の原景のように見える。

「売花翁」は、花売りに身を落とした一人の翁が、自分の来歴を語るという形式をとっている。「我」は、幼少時から親しんできた初恋の少女に想いを抱いていたが、親の薦める相手と結婚せねばならぬことになる。彼は、少女と駆け落ちすることさえも思い描くが、初恋は遂げられず、親の薦める女性と結婚する。少女は去る。だが彼は、その少女への想いを忘れることができず、結局離縁する。その後、彼は偶然初恋の少女とそっくりの女性を見つけ、結婚する。だが彼はその妻と遊び暮らし、家業を破綻させ、妻に逃げられてしまう。失意の中で、彼は二度と結婚はせぬと決心し真面目に働く。その後また結婚す

ることになり、今度は貧しいながらも愛情のある真の幸福をつかみかける。だが、妻は突然病死してしまう。そして花売りとなった彼は、「此の世ハ馬鹿らしく」、「この身に成て見れば花売りハ絵にかいたほど面白いものにあらず」という虚無感や孤独感を抱くに至る。

ここには、初恋が実現せず、その影を追い求めて、生涯を狂わされていく悲劇がある。そしてまた、心を入れ替え、やっと手に入れようとした平穏な家庭生活も、妻の突然の死によって失われる。その背景には、本当に愛した者とは添えないという人の世の巡り合わせや、結婚しても妻が逃げてしまうという人の心の分からなさや、家庭的な幸福が得られようとする寸前での妻の病死といった、人間を翻弄する力が描き込まれているのである。緑雨の描き出す世界には、こういった不条理の感覚がある。

例えば「かくれんぼ」は、山村俊雄という一人の男性が、女性を次々に取り替えていくのであるが、そこには、彼自身の意志らしきものは感じられない。彼は、「小春ハ野々宮大尽最愛の持物」という噂が耳に入ったため小春からお夏に移り、「何処で聞いたか氏も分らぬ色道じまん」に「心底嘆服」して秋子に言い寄り、入れ上げたあげく裏切られ、「ひよんなことから」冬吉と離れられぬようになり、「朝夕を共に」したところ「冬吉のくどいに飽いて」しまう。このように、彼は偶然や惰性といったものによって動かされていくのである。(8)

また、「門三味線」にも、

持ちやう一つの心に神ハありながら棚にまばゆき燈明かゝげて、守らせたまへと形の神をたのむ果敢なさ、ながめハ初花も苔のまゝ開かずバ、だまされて誇る色香の末、雨によごるゝこともなし、這うまい立つまい歩むまい、這うとも立つとも歩むとも、六つか七つか八つを限りに何故人ハ死なぬぞ、それ其処に笹があるサツサと逃げたが嘘のはじめ、年ゆゑ汚るゝ浅ましの身ハ、うまれたが是非なの世にこれも因果か。

という一節がある。ここには、生そのものへの根深い懐疑が見られる。そして「門三味線」は、純心だった二人の少女が、一人の少年を間にして、時が流れ、年齢を重ねると共に、恋情と嫉妬に目覚め、人間関係の複雑さに巻き込まれていく予兆を示している。

これらのことから感じさせられるのは、人間の意志というものの無力であり、人間を翻弄する何ものかの力の強さである。緑雨の、「恋」や「太平」に対する不信の背景には、このような、どうにもならぬ不条理の深淵が広がっているのである。

緑雨は、恋愛神聖論への攻撃者となる。緑雨の暗さは、この深淵から抜け出す術を見出せず、徹底した攻撃へと転じていくところにあった。先にも引用したが、「太平が出来ないものなら、寧世の中を、常に黒雲の立ち迷うてゐる、闇にしてしまふ方がよい。」、「花もどうせ散る花なら、早くちるがいゝ、嵐をつかまして愚痴を云ッてるよりは、棒をもッていッて、はたき落として仕舞へ」と、緑雨は述べる。それは、時代の中で徹底的に「嫌」を通す存在として、生きてゆくことであった。

三

緑雨は、三人冗語の一人として、樋口一葉の「たけくらべ」を激賞

し、急速に一葉に接近していく。一葉もまた、「逢へるハたゞの二度なれど親しみハ千年の馴染みにも似たり」（明二九・五・二九「ミつの上日記」）と、緑雨に強い関心を示している。この二人の作家には、互いに呼び合うものがあったようである。

冒頭にも述べたが、緑雨の「門三味線」には、「たけくらべ」の影響が強く見られる。それほどに強い関心を緑雨が抱いたのは、「たけくらべ」もまた、初恋が遂げられぬ残酷な運命を描き出していたからではなかったか。一葉にとっても、恋はかなわぬものであり、それを阻むのは不条理な力であった。緑雨が一葉の文学に惹き付けられていった理由の一つは、そこにある。

一葉も、デビュー作「闇桜」（明二五・三）以降、「別れ霜」（明二五・四）、「たま襷」（明二五・四）、「五月雨」（明二五・七）、「経つくえ」（明二五・一〇）、「暁月夜」（明二六・二）と、様々な抗し難い原因によって恋に破れ、その結果あるいは死に至るという、似たパターンの物語を、繰り返し描き続けてきた。[9] 一葉もまた、「書く」ことの根底に、「恋」の喪失を抱え持っていたのである。そして後には、一葉も、「十三夜」（明二八・一二）、「うらむらさき」（明二九・二）「われから」（明二九・五）と、結婚の悲劇を描いていく。

一葉は、「闇桜」発表以前から後々まで、『女学雑誌』に高い関心を示し、読み続けている。[10] 恋愛神聖論という新しい理想は、一葉をもまた苦しめたのではあるまいか。「恋愛」、「結婚」、「ホーム」という物語からずり落ちたところに、この二人の作家はいたのである。

だが、この一葉の「闇」は、社会に対峙する表現としての通路を獲得していく。それは、「暗夜」（明二七・七～一一）のお蘭の、波崎という政治家への暗殺として現れる、あるいは、「大つごもり」（明二七・一二）の石之助の、貧者たちに金銭をばらまくという一種のヒロイズムとなって現れる、この世と格闘する、「革命」の意識である。

そして、一葉はあらゆる苦しみの根源に、「金銭」の非情さというものを見据えていく。「大つごもり」は、拡大していく貧富の差の中で、誠実に生きようとしている一人の下女の盗みをとらえている。「たけくらべ」では、大音寺前という金銭に支配された町と大人たちの姿が背景に描かれており、子供たちもまた、その関わりの中で生きることを余儀なくされている。「にごりえ」では、酌婦お力が自分の一生を狂わせた原風景として語るのは、七つの年の冬に米を溝にこぼした、貧しさから発する悲しい体験であり、それはお力の愛人であった源七の息子太吉に繰り返されていく。そして「われから」では、妻美尾の心を狂わせ夫を裏切らせてゆくものとして、金銭が描き込まれている。

それに対して、緑雨の「闇」は、この世の全てを否定する、出口を探り当てられぬ「闇」であった。

緑雨はまた、一葉の「暗夜」のお蘭について、「うらめる男の文おこしゝに憤りはむねにミちつゝ猶そしらぬ顔にかへしした〻むるの條ありき　あれこそハつゝみなき御本心なるべけれ、」（明二九・七・一五「ミつの上日記」）と述べ、強い関心を示している。ここにも、緑雨が一葉の文学に惹かれていった、もう一つの理由がある。緑雨は、一葉の描く女性の心の「魔」なるものにも、惹かれていったのではなかったか。

一葉の「軒もる月」（明二八・四）には、夫ある女性お袖が、以前の奉公先の「櫻町の殿」からの手紙を読みながら、恋に身を焼く姿が

描かれている。

やつれたりとも美貌とは誰が目にも許すべし、あはれ果敢なき塵塚の中に運命を持てりとも、穢なき汚れは蒙むらじと思へる身の、猶何所にか悪魔のひそみて、あやなき物をも思はするよ、（略）櫻町が殿の容貌も今は飽くまで胸にうかべん、我が良人が所為のをさなきも強いて隠くさじ、百八煩悩おのづから消えばこそ、殊更に何かは消さん、血も沸かば沸け炎も燃へばもへよとて、微笑を含みて読みもてゆく、（傍線塚本、以下同様）

ここでは、不貞の恋に誘われていくお袖の想いに対して、「悪魔」という言葉が使われている。

一方、緑雨もまた、猪野謙二氏[11]が指摘するように、人間の心に潜む「悪魔」に惹かれた作家であった。猪野氏も挙げているが、亡友緑雨への呼びかけとして書かれた島崎藤村の「沈黙」（大二・二）に、次のような一節がある。

君が木村さんのところへ行つて、『ファウスト』の梗概を聞いて来た時には、全く君も感心した顔附きで、

『どうも異人はエライ。彼様いふことを考へてる―実は僕も、悪魔といふものを書いて見たいと思つたが、異人はもう疾くにそれを遣つている。』

緑雨は「悪魔」を書こうとしていた。彼は、女性の中に潜む「悪魔」もまた、描き出そうとしていたのではなかったか。先にあげた「売花翁」では、花売りとなった「翁」が、妻は「魔物」であると述べる。また、「柴小舟」（明二四・八『東洋新報』）では、自ら請うた嫁に対して、婚姻後一転して残虐なまでにいじめる姑の姿が描かれている。それらは、今一つ、一葉の描く女性達のような内的な膨らみを持つには至らなかったにせよ、女性嫌悪[12]というよりは、女性の「魔」なるものを覗き込もうとしていたことの現れではなかったかと思われる。

一葉は晩年に、「うらむらさき」、「われから」と、姦通する女性を描くようになる。一葉の死後、緑雨が『校訂一葉全集』の校訂に尽力したことを考えるとき、これまで、女性を憎悪し罵倒したとされてきた、緑雨の不貞や姦通に関する言葉は、もう一度見直されねばならないだろう。

四

緑雨の「眼前口頭」（明三一・一～三二・三）は、女性についての過激な記述が多く、連載の一回分[13]が風俗壊乱及び秩序壊乱の廉で発禁処分を受けた問題作である。この中で、緑雨は、例えば次のように記す。

○彼の妻を見よ、飼犬を見よ、大差ありや。餌を与ふることを忘れずバ、吠ゆることなし。

○生殖作用ハ、生活作用也。飢ゑざらんが為といふこと、女子が結婚の一条件たるを以て見れバ。

確かに、女性を嘲笑し罵倒しているように見えるが、緑雨の本当の主張は、逆のところにあったようである。次のような一節が見られる。

○わが所思をつらねたると、時弊をうつしたると、換言すれば正面と側面とを、眼前口頭ハ一々区分せず。されバ宗教、社会、及び婦女といふことに関係ある諸雑誌の、この程ハ一斉にわれに鉾を

向けたれども、多くは誤読者のみ。答ふべき義務なし。其芸娼妓を目安とすといへる記者の如き、頭脳の不透明を憫むの外無し、わが目に触れし限りにて八、唯り六合雑誌のみぞ、解を誤らざるに近かりける。

緑雨が、多くの雑誌の攻撃を誤読とし、ただ一つ「解を誤らざるに近かりける。」といった『六合雑誌』の、第二一八号（明三二・二）「時評」、「時事雑感」には、次のような記事が載せられている。

緑雨なる人あり萬朝報に「眼前口頭」と題して頻りに婦人の堕落を描き出したり、（略）吾人余りに其語の酷なるを嫌ひたりき、退ひて考ふるに方今の女子滔々此大病に罹らざるもの夫れ幾何ぞ、

予輩は切に当今の女子が品位を保たんことを望む也、（略）否、交際社会の花、家庭の女王たる品格と愛情を保たんことを望む也、女子は則ち社会の母たるを知らずや。（略）利巧なる当世の女子は金銭ある所に嫁するを知れり、利欲の為には人の妾たるを以て己の権利の如くに思へり、真に相思相恋の情を以て其夫を選ぶ者能く幾人ぞ、嗚呼男女の婚姻は利益の問題となれり、金銭の問題となれり、風教の衰微一に茲に至れるか、

婚姻の重んぜられざるは道徳の尤も衰へたる徴也、人心の尤も堕落したる徴也、婦人が其冠たる真の愛情を失ひたる徴也、精神的恋愛の衰ふるは人心の俗化せる著しき徴なり、世の女子唯金銭の為に婚し、若しくは獣欲の為に婚するか、其動産視せらるゝ固より也、（略）嗚呼当世の女子は堕落しぬ、

緑雨の記述が、この記事をさしていることは、『六合雑誌』の次号、第二一九号（明三二・三）に、「嚮に緑雨子の文を評するや彼は萬朝報に掲げて『尤も善く吾意を解し得たりと思はるゝは六合雑誌のみなり』と謂ひたりき、」と、書かれていることからも明らかである。

『六合雑誌』は、キリスト教主義の雑誌であり、この記事にも、「家庭の女王」、「真の愛情」、「精神的恋愛」といった言葉が見られるように、恋愛神聖論の系譜にあった[14]。緑雨は、この『六合雑誌』の、「真の愛情」もなく金銭のために結婚する女性に向けた警鐘という理解の仕方を肯定する。緑雨の言葉は、女性の「真の愛情」を求める逆説的な警句であったといってよい。

だが、『六合雑誌』の記事が、全て緑雨の主張と一致するという訳ではない。『六合雑誌』は、女性が「家庭の女王」であることを理想とし、また、「婚姻の重んぜられざるは道徳の尤も衰へたる徴也、」と、ここでは「道徳」を肯定する態度を示している。

緑雨の立場は、こういった理想とする女性像や「道徳」の捉え方という点では異なるのである。「眼前口頭」に、次のような箇所がある。

○女子の貞節八、貧の盗みに同じ。境遇の強ふるに由る。

○嘗て女の手に、剣を執れる世もありき。闘へる也。扇を取れる世もありき。舞へる也。今八只男の肩に懸くるか、頸に懸くるかより能無き世となりぬ。寝ぬる也。

さらに、後の「大底小底」（明三六・五～七『二六新報』）にも、

○われの女に望む所、甚多からず。夫が不在に持逃を為すの勇気ありて、而して之を為さゞる者。

という言葉がある。

緑雨が求めていた女性像は、貞淑な「家庭の女王」というのとは異

なり、闘う女性、勇気ある女性であったようである。

そしてまた、緑雨は、「道徳」に対しては、一貫して批判的な態度をとり続けている。まず、「眼前口頭」から少し挙げる。

○敢えて貞節のみと八言はず、身に守る者いよ〳〵多く、心に守る者いよ〳〵少し。心身の二字妥当を欠かバ、宜しく表裏と改むべし。道徳八必ずしも実践におよばず、口先のものなり、寧ろ刷毛先のものなり。霞の光のありとのみにて、雲の影のなきも可なり。治まる御代の景物なり。御愛敬なり。

○おもへらく、親子兄弟、是符牒のみ。仁義忠孝、是れ器械のみ。

○善の小なる八之を新聞紙に見るべく、悪の大なる八之を修身書に見るべし。

このように、緑雨は「道徳」に対峙する姿勢を示す。それは、後々にも貫かれていく。「霏々刺々」（明三二・六～八『読売新聞』）でも、次の様に記されている。

○道徳を言ふ者、道徳の仮面を被る者、近時著く増加したり。未然に言ふに非ず、既然に言ふ也。言ふ者奚ぞ恃むに足らん、被る者稍恃むべし。一国文化の増進八、この仮面あるがためなること、夙に歴史のわれらに諭示する所也。

○何人も異議なき道徳の見解八、自身之を守るを必せず、他人之を守るを必すといふことに帰着すべし。

さらに、「長者短者」（明三五・二～八『二六新報』）でも、

○道徳の示す所は、気根の衰へ也。世は争ひの竟に勝つ能はざるとき、道徳を唱ふるもの多し。道徳国は早老国也。

とあり、道徳批判は変わらない。

このように、緑雨は、「道徳」に対して批判的な態度をとり続けるのである。[15]

緑雨は、「真の愛」を求めると同時に、勇敢な女性を肯定し、「道徳」に抵抗している。このことを考える時、「眼前口頭」の、発売禁止になった以下のような、女性の「不貞」をけしかけるような挑発的な箇所は、野口武彦氏[16]が「ほとんど女性憎悪というに近い毒舌を浴びせかけた」というのとは、異なる理解を迫られるのではなかろうか。

○何故に女子八貞淑ならざる可らざるか。何故に女子をして貞淑ならしめざる可らざるか。女子に操ありと信ずる者八、自己の零落を知らざる者也。相携へて途上を行くとせよ、妻の眼の何ものに注がれ、妻の眼に何ものゝ映れるかを、夫八察知するの能力なき者也。況んや抑制をや。能力と言はざる迄も、妻が夜毎の夢の始終を、明かに聴く可き信用だに無き者也。

○希はく八安んぜよ、満天下の女子諸君。現行犯ならざる限り八、すべての女子八操正しき者なり。

○恐らく八有夫姦八、法律の禁ず可きものにあらざるべし。

○われ八貞婦、烈女の伝を読みて、かゝりし人のまことに在りけんよしを確信したり、嘆称したり。されど若われと同じき世に在らしめバ、もはや理窟の要なし、これ八たまらぬとより多くを言ふ能はず。

一見、確かに過激である。だが、明治二〇年代後半から三〇年代前半という時代は、日清戦争前後の反動的な気運の中で「道徳」が復活し、女大学的な貞節が再び強く求められていく時代であった。国分操子『日用宝鑑貴女の栞』（明二八・一二）などにも、「三従の教」が強

く打ち出されてくる。先にあげたように、緑雨自身も「霏々刺々」で「道徳を言ふ者、道徳の仮面を被る者、近時著しく増加したり。」と述べている。このことを考慮するならば、緑雨のこれらの言葉は、そういった動きに対する抵抗の言葉であったように思われてくる。

あえて女性の不貞をあからさまにしながら、「何故に女子をして貞淑ならしめざる可らざるか。女子に操ありと信ずる者ハ、自己の零落を知らざる者也。」という緑雨は、女性を、ある意味では男性と同じ次元から捉えようとしていた。一見、女性嫌悪とも取れる言葉ではありながら、うるわしい女性像が描かれていく中で、女性が持つ「魔」の部分を感覚的にではあっても捉えていたのである。そして緑雨の言葉は、「道徳」の強制によって、その人間の「魔」が隠蔽されていくことに対する反論であった。「眼前口頭」に、次のような一節がある。

○更におもふ、人生の妙ハ善ありて生ずるにあらず、悪ありて生ずるなりと。世に物語の種を絶たざるもの、実に悪人のおかげなり。吾をして歴史家たらしめバ、道真を伝ふるに勉めんより、時平を伝ふるに勉めん。吾をして戯曲家、小説家、若くハ詩人たらしめバ、徒らに神の御前に跪かんより、悪魔とゝもに虚空に躍らん。

緑雨は、人間の「悪魔」のなかに、作家として描くべきものを見いだしていた。

この「悪魔」という言葉から、先程述べた一葉の描いたお袖の心の「悪魔」を想起するならば、一葉もまた、「軒もる月」(明二八・四)以降、「うらむらさき」(明二九・二)のお律、「われから」(明二九・五)のお美尾、お町と、妻の不貞を描いている。そしてその頃から、不貞の妻は、しばしば明治の小説の中に描かれていくことになる。泉鏡花の「外科室」(明二八・六)しかり、これもまた発禁になった島崎藤村の「旧主人」(明三五・一一)しかりである。緑雨の「眼前口頭」は、こういった同時代文学と歩みを同じくするものとして捉え直されねばならないだろう。

緑雨の「眼前口頭」は、女性嫌悪という表層の深淵で、女性の、「魔」なるものに繋がる可能性をも含んだ「真の愛」を求め、「道徳」からの自由を訴えているのである。そして、「眼前口頭」の発禁という事件は、人間の精神の「悪魔」を描こうとした緑雨の、「道徳」という名の下に反動してゆく国家制度との、作家としての闘いを顕わにする出来事であった。

しかしながら、緑雨には同時に、「恋」に対するどうしようもない不審が、ぬぐい難く根を張ってもいる。「眼前口頭」には、「恋ハ花か、色は実か。花の実となるハ必然にして偶然也、偶然にして必然也。散れよ花、花ハ初めより散るに如かず。忘れよ恋、恋ハ初めより忘るゝに如かず。」という一節が見られる。

「道徳」からの逸脱をも辞さぬ純粋なる「真の愛」への憧れと、その「真の愛」への不審の間での彷徨が、ここにはあったのである。

五

緑雨は、一葉との出会いの後、「わたし舟」(明三二・一二『太平洋』)を最後に小説から撤退し、アフォリズムへと移行していった。一葉の小説との出会いが、緑雨の小説からの撤退をうながした可能性については、以前述べたことがある。[17] だが、その事と同時に、アフォリズム

という形式を、緑雨が、自らの言語表現にとって、よりふさわしいものとして見出していったということもできるだろう。

緑雨は、「眼前口頭」で、次のように記している。

○懺悔は一種のゝろけなり、快楽を二重にするものなり。懺悔あり、故に悛むる者なし。懺悔の味は、人生の味なり。

○打明けてといふに、己に飾あり、偽あり。人ハ遂に、打明くる者にあらず、打明け得る者にあらず。打明けざるによりて、わずかに談話を続くるなり、世に立つなり。

このように、自らの悲哀を告白し、書く、ということに潜む微かな甘美さを、緑雨は見逃すことができなかった。緑雨には、自らの「涙」を見せてしまうような小説は、書けなかったに違いない。

また緑雨は、同じく「眼前口頭」で、次のようにも書いている。

○革命来を呼べる人あり、今猶呼ぶ人あり、倶に戯れなるべし。信仰なき民は、革命なる文字を議するといはず、弄するの資格だになき者なり。

○仮に細民の群り起てりとせよ、襲ひ撃たんハ何処なるべき。米屋、薪屋、炭屋、酒屋、日済し貸、及び差配人のでこぼこ頭のみ。

○口若くハ筆もて富豪を責めんハ、徒労に属す。幾千萬言を重ねて其暴横をいふとも、暴横より得たる権勢ハ、其間も猶暴横を逞しうし続くるの余地あるなり。勝を必せざる攻撃ハ攻撃にあらず、攻撃の甲斐無し、敵をして防備を厳ならしむるに過ぎず。

緑雨には、「革命」もまた、信じられなかった。彼は、文学による「闘い」にも、あからさまに身を投じることは出来ない。緑雨は、冷笑し、嘲笑するしかなかった。

緑雨の冷笑、嘲笑は、「告白」や「革命」などといった様々な情熱的な行為に、陶酔できぬ醒めた眼差しからもたらされたものである。それは、緑雨の悲劇としての笑いであった。

そして、アフォリズムという形式は、皮肉や嘲笑の中に、逆説的に一つの世界を表現する可能性として、見出されていったのではなかったか。緑雨にヒントを与えたものとして、中野三敏氏[18]は、森鴎外訳の「ラブルユエールが箴言数則」(明二三・三)、「毒舌」(明二四・三)を挙げている。指摘された鴎外訳の「毒舌」には、例えば、「断えず番人を付けおかでかなはぬやうなる品行は、その番人ほどの価値なし。Goldsmith.」とか、「自ら守らむとおもはざる女ほど守りがたきものは世になかるべし。La vie Parisienne.」といったように、女性の不貞に関する言葉が綴られている。これらの表現が、緑雨になにがしかのヒントを与えたと考えられる。そして「毒舌」と「眼前口頭」との間には、次のような、響き合う一節を見ることができる。

○来しかたをも思はず、行末をも思はぬ思は恋のみなり。Balzac.

(「毒舌」)

○相見バ恋ハ止むべきか、相逢はバ恋ハ止むべきか、相語らバ恋ハ止むべきか。切に求めて休むことなきものハ恋也。

(「眼前口頭」)

どちらも、恋の盲目を捉えた表現である。さらに次のように、類似する表現を持った一節もある。

○目は魂の窓にして、道ならぬ恋の裏門なり。Ch. de la Ferriére.

(「毒舌」)

○何故に女子ハ貞淑ならざる可らざるか。何故に女子をして貞淑な

らしめざる可らざるか。女子に操ありと信ずる者ハ、自己の零落を知らざる者也。相携へて途上を行くとせよ、妻の眼の何ものに注がれ、妻の眼に何ものゝ映れるかを、夫ハ察知するの能力なき者也。況んや抑制をや。能力と言はざる迄も、妻が夜毎の夢の始終を、明かに聴く可き信用だに無き者也。　（「眼前口頭」）

どちらも、「道ならぬ恋」を覗く窓としての「目（眼）」を捉えている。鴎外訳「毒舌」は、「眼前口頭」に大きな影を落としている。

緑雨は、新しい表現形式として、アフォリズムを探し求めていたのである。そこには、胸中に悲劇を抱いた人間の、いささか苦い「笑い」の文学としての可能性があったのではなかったか。

そしてそれは、北村透谷没後の「文学界」にせよ、やがて登場する自然主義文学にせよ、「涙」や「告白」の甘美さに流されていく日本の近代文学が、取り得たかも知れないもう一つの、「笑い」の文学の可能性としてあったのではなかったか。

おわりに

緑雨の恋愛神聖論に対する批判の根底には、緑雨なりの、「真の愛」や「太平」への渇望があった。だが緑雨には、こういったことが、この世においてかなわぬものであるという不条理を、見逃すことはできなかった。そして、かなわぬのなら全てを「闇」にしようとするところに、緑雨の深い暗さがある。緑雨も、人目の届かぬところでは、「己を厭」い、「己を罵る」者であった。

緑雨は、「たけくらべ」を契機に、一葉に急速に接近していく。一葉もまた、当時の「恋愛」や「ホーム」といった理想からこぼれ落ち、この世の不条理の前でそれらを懐疑し、「書く」ことに賭けてきた者であった。このような点において、二人の間には、呼び合うものがあったのである。さらに、二人はまた、人間の「悪魔」を見ようとした者たちでもあった。彼らは、「道徳」を破る妻の「不貞」を取り上げていくのである。

緑雨は、女性を罵倒し、憎悪したと言われる。その特色が顕著に表れた「眼前口頭」は、しかしその深層においては、女性の「真の愛」を求め、また、女性の「不貞」を、「道徳」の抑圧から解放しようとしてもいる。人間内部の「悪魔」を描こうとした緑雨の、日清戦争後急速に反動し、広がってゆく「道徳」に対する抵抗が、垣間見える。

そして、アフォリズムという形式は、皮肉や嘲笑の中に、逆説的に一つの世界を表現する可能性として、緑雨に見いだされていったのであり、日本の近代文学が主流として歩むことのなかった、「笑い」の文学というもう一つの道の可能性を示してもいるのである。

世のあらゆるものを罵倒し続ける皮肉屋、女性を激しく嘲罵し嫌悪したと言われる緑雨の、激しい言葉の深層に横たわっているのは、意外に純白な「恋」への憧れと、世の不条理の渦に沈み込んで逃れられなかった深い「闇」ではなかっただろうか。

注（1）湯地孝「斎藤緑雨の文学」（『現代日本文学全集』第五三巻一九五七・一〇筑摩書房）

（2）野口武彦「斎藤緑雨――明治シニシズムの運命――」（『中央公論』第八四巻二号一九六九・二）

（3）塚越和夫「斎藤緑雨――女性憎悪とPedophilia――」（『国文学解釈

と鑑賞』第四八巻七号一九八三・四）

（4）拙論「樋口一葉と斎藤緑雨――小説における類縁性と差異――」（『論集樋口一葉Ⅲ』二〇〇二・九おうふう）

（5）桜井精作「婚姻箴」

（6）現存する原稿は第四回分のみであるが、話の大筋としては変わりはないようである。

（7）「妾は実に君を愛すと舶来の文句も未其ころハ流行らねバ」という言葉もあり、ここでも緑雨が恋愛神聖論を意識していたことが伺える。

（8）猪野謙二氏の「緑雨の『悪魔』」（『明治の作家』一九六六・一一岩波書店）に、「かくれんぼ」について、「人間を動かしたり結びつけたりするのは、その愛情とか熱誠とかいったものではなく、むしろそれらとまったく無関係な偶然か惰性かに過ぎない。」という指摘があるが、氏はそれを「悪のたのしさのごときものが漂っている。」とする。

（9）例えば、「別れ霜」のお高は、父親の欲望と策略のために引き裂かれ自害する。「たま襷」のいと子は、二人の男性に慕われ自害する。「五月雨」のお八重は、乳兄弟への恩義のために結ばれず、「経つくえ」のお園は、時間的なずれと男性の死のために添えず、「暁月夜」では身分や出生の秘密が原因となっている。

（10）一葉の日記を見ると、「闇桜」を発表する以前、明治二四年頃から『女学雑誌』を読んでおり、後々まで高い関心を持って読み続けていたことが伺える。

（11）猪野謙二氏（前出）は、「この日本の文学的風土において、いち早く『悪魔』の存在に触れた緑雨は、また誰れよりさきに『破滅』の文学を体現した人でもあった。」と述べている。

（12）塚越和夫氏（前出）は、「柴小舟」の「お作のいじめぶりの徹底さにも女性嫌悪が見られる」と述べている。

（13）明治三二年三月二日『万朝報』掲載の第二三回分である。

（14）『六合雑誌』次号、第二一九号にも、「時評」「緑雨子の恋愛論」に、「恋愛は精神的なり、其心髄に於て心霊的なり、」「予は当今の社会が真正の恋愛を解せざるを歎く、」とある。

（15）遡って「作家苦心談」（明三〇・五～七）にも「道徳論者などゝいふ者は豆腐の如きものだ、（略）唯道徳の網の下にかゞんで平伏してゐるのはつまらない」とあり、緑雨の道徳批判は一貫している。

（16）野口武彦（前出）

（17）拙論（前出）

（18）『緑雨警語』（一九九一・七富山房）解題。その他にも、ビアス「悪魔の辞典」や、「論語」・「老子」等の東洋古典、近世諸儒の文章、鎌倉末の仏書、また「徒然草」・「枕草子」等から近世小説までの広い目配りからの指摘がある。

（つかもと　あきこ、和歌山工業高等専門学校助教授）